

古代東国の地域学的研究
— 室^{むろ}の八島^{やしま}と古代製鉄 —

群馬県立女子大学 群馬学センター
リサーチ・フェロー

樽本高壽 五島高資

はじめに

「古代東国の地域学的研究 — 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 —」において、関東における鍛冶神としての人麻呂信仰と関連する古代製鉄の中心地として栃木県栃木市の「室の八島」とその周辺が推測され、今後さらなる精査が必要と考えられたことから、今回は、室の八島と古代製鉄の関係について精査し考察した。

1. 室の八島

(1) 室の八島の歴史

室の八島は、下野国府（今の栃木県栃木市惣社町）付近にあったとされ、平安時代以降、煙を詠み慣わすしきたりで和歌に詠まれてきた歌枕の地である。

いかでかは思ひありとも知らすべき室の八嶋の煙ならでは
いかにせん室の八島に宿もがな恋の煙を空にまがへん

藤原実方
藤原俊成

このように室の八島の煙は、恋に身を燃やす煙に喩えられて詠まれた歌が多く残っている。

しかし、室町時代には、連歌師・柴屋軒^{さいおくけん}宗長が指摘したように、当時の室の八島は「誠に打見るより淋しく憐れな」場所となっていた。また、江戸時代では、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅で訪れ、「糸遊^{いとゆう}に結びつきたる煙哉」と詠んでいるが、室の八島の印象を一切述べていない。つまり、少なくとも平安時代の室の八島と室町時代のそれとは異質であることが窺われる。

(2) 室の八島の変遷

平安時代末期に書かれたけんしょう しゅうちゅうしょう顯昭著『袖中抄』には、室の八島について、「下野國野中に島あり（中略）其野中に清水の出る氣の立てるか煙に似たるなり」と述べている。つまり、平安時代までの室の八島は、低湿地に小高い丘が散在する比較的広範囲な土地を指していたことが窺われる。近世から現代において室の八島とされるおおみわ大神神社一帯とは明らかに異質である。このことは、本来の室の八島が時代を経てその所在地が変遷したことを推測させる。

(3) 本来の室の八島

『藤岡町史』によれば、「持統天皇 8 年（694）10 月、三毳山の東南に面したふいご韃湖をはさみ、東側は大前に（今の太前神社を中心に）、西側は、ただき唯木の台地に分かれ、八島きぶみのむらじもとざね黄書連本実をはじめとする熔工数人移住し」とある。また、清水喜三著『「室の八島」と煙の謎に関する一考察-旧藤岡町甲に「室の八島」を刻む金石文を発見-』には、「持統天皇御代、八島黄書なるもの熔工の業を此處に開きしより以来数百年連綿衰へず世人称して室の八島と云ふ」という記述が見られる。この出自は『下都賀郡誌』を参考にして作成された友人の資料とあるのみで確証できないが、実際に、れんげがわ韃湖（現・蓮花川）を取り囲むように古代製鉄遺跡が大前製鉄遺跡群をはじめ 22 基が発見されており、少なくとも奈良時代からこの一帯で大規模な製鉄が行われていたことが推測できる。

なお、清水喜三氏が藤岡町甲（現・栃木市）において発見した五輪塔（写真 1）の地輪の西面碑文（写真 2）の 5 行目最後から 6 行目に「本邑室之八島者」の文言が刻まれている。おそらく、この藤岡町甲にあった村に存在した室の八島のことを示しているものと考えられる。

また、同地輪の東面碑文（写真 3）には、金剛般若經の頌と共に次の二首が刻まれている。

いかなりし恋の煙に消えやらで室の八嶋に名を残しけむ	俊成
かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしも志らじな燃ゆる思ひを	実方

一首目はまさに「室の八嶋」を詠んだものである。また、二首目には栃木市伊吹町にある歌枕の地「いぶき（伊吹山）」が詠まれている。共に「煙」と「燃ゆ」という「火」の縁語が見られ、火を用いる製鉄との関連も考えられる。

なお、この五輪塔のある境内には地藏堂（写真 4）があり、往時、安産の祈願で賑わったという口碑が残っている。この地藏堂は、お産と関係の深い「無戸室」、さらには竪型炉（ブルーム炉）との関連も想像される。

これらのことを総合すると、かつて韃湖一帯に大規模な古代製鉄基地としての「室の八



写真 1

島」が存在したことが推測される。現在、室の八島とされる大神神社は、藤岡町甲から東北方向に十数キロ離れた場所にあるが、渡良瀬川の支流どうしで繋がっている。鉄の原材料を葦原に多く産出する生物由来の湖沼鉄だとすれば、それを追って「室の八島」もまた北上した可能性が考えられる。古代製鉄には、大量の炭が必要であり、森林資源を確保するためにも製鉄基地が時代と共に移動するのは容易に推測される。



写真 2

(4) 室の八島と柿本人麻呂

前述したように本来の室の八島が藤岡町甲附近だとすると、その直ぐ近くに四社神社があり、柿本人麻呂が祀られている。人麻呂が古代製鉄に関係していることはすでに拙論「古代東国の地域学的研究 ― 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 ―」に詳しく述べたので割愛するが、持統天皇の御代に開設された室の八島が古代製鉄場として設けられたのであれば、人麻呂の時代とも重なる。持統3年(689)8月11日と翌4年2月25日に、帰化した新羅人をそれぞれ下毛野国と武蔵国へ送ったことが『日本書紀』に記されており、そのいずれかの際に人麻呂が随行して東国へ趣いた可能性が高いとした神田秀夫氏の説とも時代的に一致する。

2. 蓮花川(旧・韃湖)

(1) 蓮花川と韃湖

飛鳥時代、岩船山を發した蓮花川は、三毳山の麓を通り、旧藤岡町大前との間に、韃湖と呼ばれる大きな湖を形成し、やがては渡良瀬川へ注ぎ込んでいた。平安時代には、まさにそのあたりは低湿地が広がり

「野中に島あり」と呼ばれるに相応しい地勢であったことが推測される。利根川にも近くまさに河川交通に恵まれていたが、明治時代になると新田開発のために干拓が進み湖は消えて蓮花川のみが残ることになった。(図1)

また、蓮花川には、河童伝説が残っている。「河童」が、湖沼鉄を採取することを生業とした水人を象徴するかもしれないことは、すでに「古代東国の地域学的研究 ― 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 ―」でも指摘したが、韃湖周辺の低湿地で採れる生物由来の湖沼鉄が古代製鉄の原料に供された可能性も示唆される。もちろん、韃湖の「韃」が製鉄に関わっていることは言うまでもない。

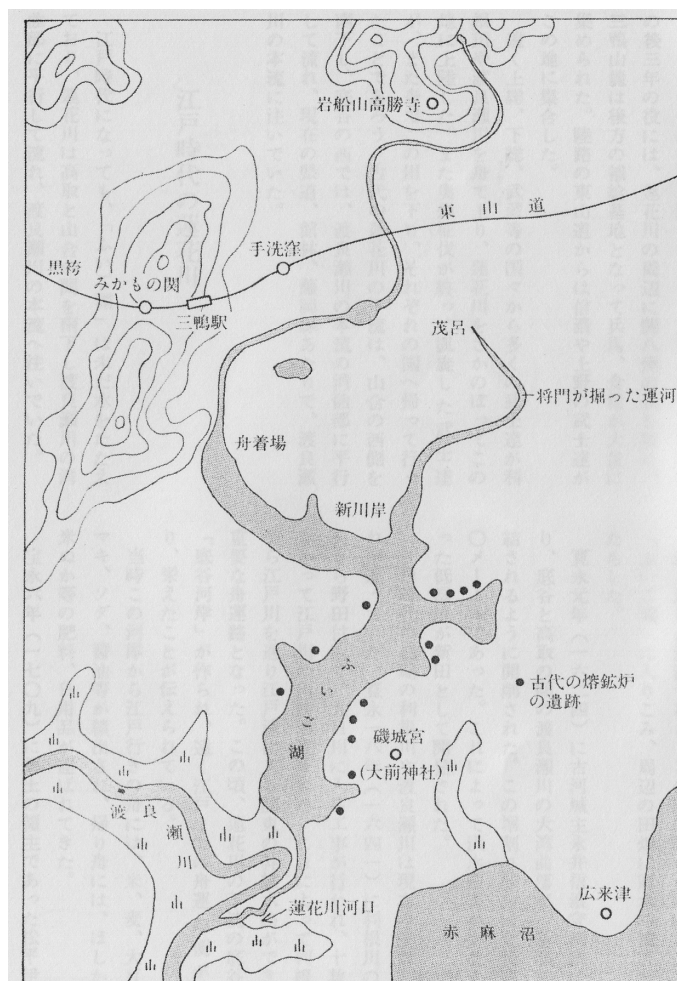


図1

(2) 蓮花川と平将門

前述の五輪塔および一石五輪塔が発見された藤岡町甲のすぐそばには、かつて韃湖であった蓮花川が流れている。その一支流を北東へ溯ったところに御門館跡があり、平将門の支城があったと伝えられている。また、将門は蓮花川から東山道に近い茂呂へ運河を掘らせて水上交通を整備したとも云われる。本拠地の茨城県猿島町（現・坂東市）へは渡良瀬川・利根川を介して結ばれている。その地の利を活かして将門は、蓮花川（韃湖）一帯の製鉄施設を確保したのではないだろうか。承平・天慶の乱において中央政府と対峙するためには大量の武器が必要である。その原料である鉄を確保するために大規模な製鉄場を支配することは将門にとって重大な意味を持っていたと考えられる。現在、御門館跡には、御門神社（写真6,7）があり、将門が祀られている。



写真 6



写真 7

なお、御門神社の100mほど南に三つ島を浮かべる池（写真8）がある。最も大きな島の祠には白蛇の像があることから、弁天池と考えられる。大神神社の池を彷彿させる光景であり、このあたりにもかつて「室の八島」が存在したのではないかと想像が膨らむ。

また、蓮花川から御門神社へ至る水路（写真9）も確認された。



写真 8



写真 9

(3) 蓮花川と天明鋳物

『三鴨誌』^{みかも}によれば、持統天皇の御代より蓮花川と接する三毳山^{みかみ}の麓に大川天命^{おおかわてんみょう}

鋳物師^{いもじ}の屋敷と炉跡があったと記されている。その後、640年を経た延元4年（1339）、

大川天命は北朝の命で鋳物師たちの宰配者となり武器を作るとともに、故天明^{ちやがま}の茶鐺と一

般に称される名作を作るに至った。しかし、大永2年（1522）に安蘇郡銅師町^{あかがねし}、永禄11年（1568）に足利郡寺岡村、天正14年（1586）に安蘇郡上田島村（現・佐野市天明町）へと移転され、現在に至っている。安土桃山時代には、「西の芦屋に、東の天明」と称され珍重されたが、その濫觴は奈良時代の蓮花川にあったのである。

清水喜三によれば、韃湖の近く大前神社近辺に天国府という地名があり、天国（海国）である壱岐、対馬、玄界灘に面する福岡の芦屋が連想されるとし、古代、大陸からの製鉄技術が海を渡って伝わったのではないかと推測している。私としては、同じ海峡島嶼国として天国に属する五島列島を介した大陸南部からの鍛造技術の移入も想定したい。鍛造製鉄は、大陸北部の鋳鉄技術より低い温度でも製鉄可能な方法であり、北関東における河川や湖沼に産する「鬼板」^{おにいた}など融点の低い湖沼鉄などを用いた古代製鉄の原料とする場合に好都合だからである。

ちなみに、「芦屋釜」は、鎌倉時代に福岡の芦屋へ地頭として赴任した宇都宮氏によって興されたものであり、古代製鉄と宇都宮氏が深く関係していたことが推測された。また、前述した四社神社のある旧赤麻村はかつて宇都宮藩の飛地であり、宇都宮氏が祀る二荒山神社の主祭神が柿本人麻呂霊（仮説）ということを考え合わせると「古代東国の地域学的研究― 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 ―」で推測した人麻呂と古代製鉄の関係性もより深まる。

註：天明鋳物については、天慶2年（939年）平将門の乱のため、藤原秀郷が武具制作者として河内から5人の鋳物師を佐野に移住させたことを起源とする説もある。

まとめ

1. 清水喜三が藤岡町甲（現・栃木市）において発見した五輪塔と一石五輪塔に刻まれた「本邑室之八島」と『下都賀郡誌』の記述から、平安時代の「室の八島」は、韃湖や蓮花川周辺の低湿地だった可能性が示された。
2. 平安時代の「室の八島」は、東国における大規模な古代製鉄施設と関係している可能性が示された。
3. 古来、室の八島で詠まれてきた煙は、実は古代製鉄施設からの煙だった可能性が考えら

れた。

4. 平安時代の室の八島における古代製鉄に平将門が関与していた可能性が示された。
5. 古代製鉄に宇都宮氏が深く関与していたことが推測された。

【参考文献】

1. 樽本高壽「古代東国の地域学的研究 ― 関東における柿本人麻呂に関する事蹟 ―」『群馬県立女子大学第3期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』群馬県立女子大学群馬学センター, 2016
2. 「鋳物師の移住とその動き」『藤岡町史』藤岡町, 1975
3. 清水喜三『「室の八島」と煙の謎に関する一考察-旧藤岡町甲に「室の八島」を刻む金石文を発見-』『史談』第28号, 安蘇史談会, 2012
4. 関塚清蔵「蓮花川の変遷」『蓮花川―郷土の歴史と農業の発達』全国農村教育協会, 1981
5. 白石信作『三鴨誌』1896年

問い合わせ先

樽本高壽 <mailto:takagoto@me.com>

五島高資 <mailto:takagoto@mac.com>